

早稲田大学大学院日本語教育研究科

修士論文概要書

論文題目

シャドーイングを取り入れた  
自律音声学習における学習意欲の維持  
—長期継続者のインタビューから—

楽 タンニ

2023年3月

## 第1章 研究背景と研究目的

筆者は、一人の日本語学習者としてシャドーイングを取り入れた自律学習を一年半続けた経験がある。筆者の周りでは、「発音がよくなりたい」、「会話能力が向上したい」などの思いでシャドーイングのスタートラインに立ったが、二、三回か一週間であきらめた人がほとんどであり、半年以上シャドーイング練習を続けられた学習者はめったにいない。シャドーイングが長く続けられ、三日坊主の状態を脱却したいが、その方法が分からなく悩んでいる学習者はしばしばみられる。そこで、シャドーイングを長く続けられた日本語学習者はどのような学習意欲で支えられ、学習意欲に変化がないのか、また、変化がある場合、学習意欲が減退する時はどのように制御し、学習意欲を再生し、学習行動を続けていたかということについて疑問を抱いた。

本研究では、長期継続者はどのような学習者であり、どのようなビリーフの中でシャドーイングを行っていたかを解明した上で、具体的にシャドーイングを行う際に、長期継続者は心理的にどのような揺れが起き、そして、どのように自ら調整、対応したかを明らかにすることである。そのために、次のようなりサーチクエスチョン（RQ）を立てた。

RQ1 シャドーイングを長期的に継続している学習者は、どのような学習者か。

RQ2 シャドーイングを長期的に継続している学習者は、どのように学習意欲を維持しているか。

## 第2章 先行研究と本研究の位置付け

本研究では、自律音声学習、優れた学習者研究及び学習意欲という3つの研究分野における、1) 自律音声学習における優れた学習者、2) シャドーイングに対するポジティブな意識、3) シャドーイングにおける学習意欲の維持の工夫、4) 学習意欲における理論的枠組み、5) 学習意欲の維持における理論的枠組み、6) 優れた学習者の維持の工夫という6点から、先行研究を紹介する。本研究の研究課題は、シャドーイングを取り入れた自律音声学習における長期継続者の学習意欲の維持である。この6つの部分の先行研究と本研究の研究課題との関係は、図1のとおりである。

1) 自律音声学習における優れた学習者研究では、戸田（2008）によると、シャドーイングの実践・継続が優れた自律音声学習者の中で特徴として見られた。2) シャドーイングに対するポジティブな意識に関する研究では、唐澤（2010）によると、困難を感じる一方、シャドーイングをポジティブに捉える学習者の存在を紹介した。そして、城（2010）では、音声学習に対する意欲の有無と失敗に対する捉え方が、シャドーイングに対する意

識を左右することを示唆した。3) シャドーイングにおける学習意欲を維持するために、練習方法の工夫、意識の向き方の工夫と、教師の支援による学習意欲の維持の工夫が挙げ

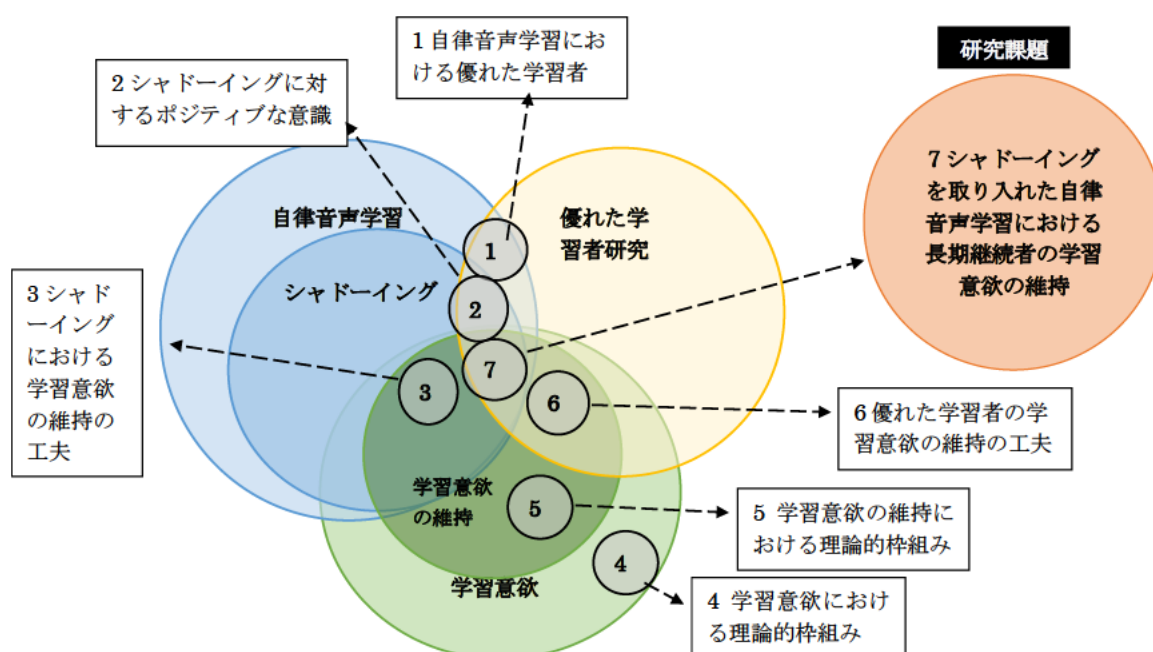


図1 本研究の位置づけ

られた。4) 学習意欲における理論的枠組みでは、Dörnyei, Z. (2001) による L2 教室における学習動機づけのプロセス・モデルと鹿毛 (2013) による動機づけの三水準理論を、本研究における学習意欲の理論的枠組みとして位置づけた。5) 学習意欲の維持における理論的枠組みでは、Deci & Ryan (2000) の学習意欲を高める三つの心理的要求と、Dörnyei, Z. (2001) が指摘した 5 つの自己動機づけストラテジーを、本研究での学習意欲の維持の理論的枠組みとして位置づけた。6) 優れた学習者の学習意欲の維持の工夫では、4) と 5) で紹介した理論を踏まえ、ボトムアップ式に日本語教育現場における優れた学習者の学習意欲の維持の工夫を紹介した。

### 第3章 研究方法

本研究の調査目的は、調査①アンケート調査と、調査②インタビュー調査の結果を基に、長期継続者の特徴と、学習意欲の維持の工夫を明らかにすることである。本研究では、鹿毛 (2013) の動機づけ三水準理論に従い、採取したデータを「特性レベル」、「領域レベル」、「状態レベル」(p.16)に分けた。そして、Dörnyei, Z. (2001) の学習動機づけのプロセス・モデルに従い、状態レベルのデータをさらに「選択動機づけ」、「実行動機づけ」及び

「動機づけを高める追観」(pp.22-23)に分け、大谷(2019)に従い、SCATによる分析を行った。

#### 第4章 研究成果

シャドーイングを取り入れた自律音声学習を、長期的に継続した調査協力者Aと、調査協力者Bの特徴は、以下のとおりである。Aさんは内発的に動機づけた学習者、自己決定した学習者である。このような学習者Aさんは、増大的知能観、誰でもできる自律学習観、コミュニケーション及び社会理解のツールという言語観、高度な音声学習目標を持っている。Bさんは自己決定した学習者、日本語愛を持つ学習者、高度な音声学習目標を持つ学習者、一生懸命努力している学習者である。

そして、シャドーイングを取り入れた自律音声学習における学習意欲を維持するために、調査協力者Aと調査協力者Bは、学習意欲を維持する工夫は以下のとおりである。Aさんはシャドーイングにおける学習意欲を維持するため、大量の真似行動を通してネイティブ発話の疑似体験としてシャドーイングを定義し、日本社会参加のための素材選択、リラックスとしてのシャドーイングの位置づけ、シャドーイングの楽しさを味わうといった工夫をした。Bさんはシャドーイングにおける学習意欲を維持するため、理想的な日本語像に近づける方法としてシャドーイングを位置づけ、控えめな練習時間を設置し、明確化した練習のプロセスを有し、自己調整を行うといった工夫をした。

さらに、調査協力者の特徴と、学習意欲を維持する工夫の間に、連動が見られた。例えば、Aさんの場合、コミュニケーション及び社会理解のツール、という言語観を持つため、シャドーイングの素材選択する際に、NHKニュースや教科書より、敢えて非標準的な日本語の素材選択や、実生活の中で日本人の使用状況を基準とした素材選択という工夫を行ったことが分かった。また、Bさんは日本語愛を持つ学習者であるため、シャドーイングだけ実践していたのではなく、ありとあらゆる学習方法を試みたことが分かった。そのため、Bさんは無意識的にシャドーイングを行い、随伴行為としてシャドーイングを定着化した。以上のように、氷山の下のアさんとBさんのビリーフは、氷山の上のアさんとBさんの行動を支えることが明らかになった。

#### 結論と今後の課題

RQ1は「シャドーイングを長期的に継続している学習者は、どのような学習者か」である。シャドーイングを長期的に継続している学習者は、自己決定した学習者、増大的知能観を持つ学習者、言語に対する高度な目標を持つ学習者、言語愛を持つ学習者、言語の社

会的価値を感じ、言語社会への好感を持つ学習者である。

RQ2は「シャドーイングを長期的に継続している学習者は、どのように学習意欲を維持しているか」である。シャドーイングを長期的に継続している学習者は、以下のように学習意欲を維持している。まず、行動面では、面白さ重視の素材選択と自分のレベルに合う素材選択を行い、短めな練習時間を設置している。

認知面では、随伴行為としてのシャドーイングを位置づけ、ネイティブ発話に近づける練習としてシャドーイングを定義づけ、発音・語彙・文法面における効果を感じながらシャドーイングを行っている。困難と遭遇する際に、学びのチャンスとして困難を捉える。

本研究の成果を踏まえ、日本語学習者に以下の3点が提言できる。

#### (1) 自律学習で遭遇したシャドーイングの困難を積極的に捉えること

本研究では、シャドーイングが好きな上級日本語学習者2人に、アンケート調査及びインタビューした結果、2人ともシャドーイングが難しいと明言した。そこから、日本語レベルや学習スタイルと関係なく、シャドーイング自体は難しいことを示唆する。シャドーイング遂行時に、失敗したり挫折を感じたりすることには必然性があることを示唆する。

そこで、本研究では、2人の研究協力者は困難を感じつつ、長期的にシャドーイングを継続したことが分かった。Aさんは困難をチャレンジとして捉え、困難を乗り越える達成感を味わいながら、学びのチャンスとして積極的に困難に向かった。Bさんも能動的に書き付けストラテジーや繰り返しストラテジーなどの工夫を行い、学びのチャンスとして困難を積極的に捉えた。以上のように、AさんとBさんの事例から、日本語学習者は自律的にシャドーイングを行う際に、前もってシャドーイングの難しさを認識する必要があり、学びのチャンスとして遂行時にある困難を積極的に捉えることで、学習意欲を維持していくことを期待する。

#### (2) 長期継続者の行動面及び認知面における工夫を参考すること

本研究では、自律学習として3年以上シャドーイングを継続した学習者に調査を行った。長期継続者は行動面と認知面で、様々な工夫を行い、成功的に学習意欲を維持してきた。AさんとBさんの学習意欲を支えてきた工夫は、日本語学習者にとって十分な参考価値があると言えよう。

#### (3) 学習意欲を維持する工夫を創出する力を持つようになること

本研究では、長期継続者が持つ氷山の下にある、見えないビリーフと、氷山の上で見られる、学習意欲の維持の行動との連動が明らかになった。その連動を観察することで、日

本語学習者は、自分の文脈と照らし合わせることで、自分にとって最適な工夫を考え出す助けになることを期待できる。

日本語教師に対しては、以下の2点が提言できる。

(1) 教師からの支援の提供

Aさんの事例により、教師は学習者の学習スタイルやニーズを十分に認識していないままで一般論的な助言を与えた場合、かえって、学習者の学習意欲を低減させる恐れがあることを示唆する。Bさんの事例により、教師から行動面における助言を与えることが重要である一方、シャドーイングの困難さに対する共感を示すことや、困難に遭遇する際に情意面における助言の提示も不可欠であることを示唆する。

(2) コミュニケーション意欲、日本語愛の重要性への再認識

長期継続者が学習意欲を維持できた源は、日本語を媒介としたコミュニケーションによりもたらした、新しい知見を得る楽しさや、人と繋がる楽しさから生じる日本語愛にある。日本語愛が存在するからこそ、学習者は高度な学習目標を持ち、さらに、目標達成のために自ら様々な工夫を試していく。しかし、日本語愛は数字で測りにくく、育成や喚起することも容易ではない。そのため、日本語教育現場では、日本語愛の育成や喚起を後回しにすることがよく見られる。本研究では、長期継続者の事例により、今一度コミュニケーション意欲と日本語愛の重要性が認識でき、日本語愛を持つ学習者を育成するような日本語教育を期待したい。

本研究では、2人の長期継続者の事例から、長期継続者が持つビリーフ、長期継続者の学習意欲を維持する工夫、さらに、長期継続者が持つ見えないビリーフと学習意欲の維持の行動との連動も明らかにした。学習意欲の維持に関連する研究の中で、研究観点の新規性が示せたと言えよう。その上で、本研究の研究観点を援用し、シャドーイングを取り入れた自律学習において、学習意欲を維持できない学習者や、シャドーイング以外の学習方法を自律学習として継続できた学習者を対象に、学習者が持つビリーフと学習意欲を維持する行動の連動を明らかにすることを今後の課題としたい。

## 参考文献

大谷尚 (2019) 『質的研究の考え方：研究方法論から SCAT による分析まで』 名古屋大

学出版会

鹿毛雅治 (2013) 『学習意欲の理論—動機づけの教育心理学—』 金子書房

- 唐澤麻里 (2010) 「シャドーイングが日本語学習者にもたらす影響：短期練習による発音面および学習者意識の観点から」『お茶の水女子大学人文科学研究』 6 pp.209-220
- 城保江 (2010) 「初級学習者におけるシャドーイング訓練時の意識—シャドーイングに対するプラス意識とマイナス意識を持つ学習者の比較—」『第二言語としての日本語の習得研究』 13, pp.39-56
- 戸田貴子 (2008) 「『発音の達人』とはどのような学習者か」『日本語教育と音声』 pp.61-80  
くろしお出版
- Deci, E. L. & Ryan, R. M.(2000) ‘The “What” and “Why” of Goal Pursuits: Human Needs and the Self-determination of Behavior’, *Psychological Inquiry*, 11(4), pp.227-268
- Dörnyei, Z. (2001) . *Motivational strategies in the language classroom*. Cambridge: Cambridge University Press. (米山朝二・関昭典訳 (2005) 『動機づけを高める英語指導ストラテジー35』 大修館書店)